
幻君

becky

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻君

【Nコード】

N4056T

【作者名】

becky

【あらすじ】

妄想の中のもう一人の妻・その女と同姓同名の女が目の前に現れた瞬間・・・誠の人生がドンドン変わって行く

はじまり・・・

この女は一体、誰なのだろう？

私は何時も1人で食事をしながら自分の目の前で楽しそうに母親と携帯電話で話をしているその女を見つめ

そんな事を考えている。

「まあーちゃん！ジイジイが話したいってさ！」

その女にそう言われる瞬間に私は決まって思い出す。

あゝこの女は私の妻の今日子なのだと・・・

私と今日子が結婚して5年の月日が過ぎようとしている。

知り合ったきっかけは私が働いているデスカウント屋に出入りしている業者の営業の杉澤と言う男の紹介であった。

「店長どうですか？そろそろ身を固めては？誰か良い方でもいらっしやるんですか？」

話は商談後のそんな他愛の無い話しから始まった。

「いや、忙しくてね！女性と知り合う暇さえありませんよ！周りの同期の奴等は皆、適当にアルバイトの女子大生とか本社の事務員の女とかに声をかけて居るようですがね！どうも私はそう言うのが苦手ですね・・・」

そんな私の言葉に杉澤は少しだけ嬉しそうな表情を浮かべた。

「そう言えば店長！私が営業にまわっている和菓子屋さんに一人娘がおりましてね！誰か良い人は居ないかと社長夫婦に頼まれておりまして！良かったら一度、会って見ませんか？店長なら私も自信を

持って紹介できるんですけどね！」

杉澤は珍味の会社の営業だが食材の卸もやっている会社の人間である。何でもその和菓子屋には小豆を卸しているそうである。

杉澤にしてみればこの話が決まれば私と和菓子屋の社長の両方に恩を売る事になる。営業をしている人間にとっては一石二鳥の話である。

私にはこの時の杉澤の「私なら自信を持って向こうさんに紹介が出来る」と言う言葉の真意が正直、今でも理解出来ない。

私は本音を言えば、別に結婚をするつもりなどまったく無かったし、自分が結婚と言うものに向いて居ない人間である事は自分自身が一番、知っていたからだ。

「そうですか！ならばお願いしますよ！杉澤さん！」

私は社交辞令で杉澤にそう笑って言った。

そんな私に杉澤も微笑みながら・

「お任せください！」と言った。

運命の女

杉澤とそんな話をした二週間後のある日、1人の女が私の店を訪れた。

私はその時、電気売り場でカタログの整理をしていた。

その時の彼女の事は今でも鮮明に覚えている。

豹柄のコートを身にまとい下は長めの紺のスカート、靴はローハイトタイプの革靴で長い髪が印象的な女であった。

正直、なんとなく清楚な空気を漂わせていてこんなデスカウント屋には不釣り合いな女だと私は思ってた。

その女は特に目的があつて来店した訳では無いようだ。電気売り場をフラフラ歩きながら時折、不自然な視線を私に向けてくる。

しかし、その時、私はその女はまったく不審に感じる事は無かった。

その女を不審と思う前にある特別な感情が私を支配していたからだ。

あゝきつと、俺はこの女と結婚をする・・・そんな何の根拠も無い無責任な自分よがりの感情が・・・

「あの〴〵店長さんの山田さんですか？」

その女は何度も私の胸に付けられたネームプレートを確認しながら決心したようにそう私に言った。

私はそんな彼女の言葉に一気に現実の世界に引き戻され焦りながら必死に営業スマイルを作ると・・・

「ハイ！私が店長の山田でございますが、お客様！何かご用でございますか？」よ

そんな私にその女は少しだけ顔をしかめて言った。

「立花商会の杉澤さんから貴方の事をご紹介頂きました。坂本今日子と申します」と

それが今から7年前の事で今日子と私の初めての出会いであった。

「私・・・太っている人はどうも・・・申し訳ないのですが、今回のお話は無かった事にして頂けますか？」

当時、94キロあった完全なる肥満体系の私に今日子がそう言ったのは数えて三回目のデートの帰り際であった。

「一応は杉澤さんの面子もあるので何回かはお会いしましたけど・・・
・どうも苦手で・・・」

今、考えると私はなぜにあの時、そう言い放った今日子に「そうですか！解りました！ご縁がなかったようで・・・」と

言わなかったのだろうか？

私はなぜ・・・あの時、今日子のそんな申し出を受けなかったのだろうか？

正直、現在の私はそんな私の行動を後悔すらしている。

しかし、その時は私はこの女の事を運命の相手だと完全に思い込んでいたのだ。

「ならばお友達から始めませんか？友達なら良いでしょ？これも何かの縁ですよ！もし良かったら携帯電話の番号を交換しませんか？」

私は本当に女性なれしていない男なのである。34歳にもなるのに

女性にそんな言葉しか言う事が出来ない・・

そんな男なのである。

そんな私の無謀な申し出に今日子は少しだけ困ったような顔をしながら・・

「アドレスだけなら・・」と言った。

それから今日子とのメル友としての付き合いが始まる事になる。

幸せな家族

今日子とメールアドレスを交換してから三ヶ月が過ぎようとしていた。

私は忙しい毎日の中、時間を作っては彼女に日に何度もメールを送った。

現在、妻と何を話せば良いのか悩んでいる自分が嘘のように感じられるほど、私は毎日、毎日、今日子に長いメールを送り続けた。

「どうすれば付き合ってもらえるのですか？」

そんな私のメールに今日子は返信してくる。

「ならば痩せてください！そうね！75キロになってください！あなたの私への想いを形にして見せてください！」

今、妻にそんな事を言われたら私はきっと、言うだろう！

「貴様はいったい何様なんだ！」としかし、その時の私はきっと、頭がおかしくなっていたに違いない。

私はその日からダイエットに明け暮れる生活をする事になるのだ！

そして、二ヵ月後のある日、体重計の75.6キロ表示を添付したメールに「あなたが好きです！私と付き合ってください！」と書いて私は今日子に送信した。

そして、今日子と私は付き合う事になったのだ。

今日子の実家は全国的に有名な老舗の和菓子屋の「春風」と言った。付き合い始めて数回、今日子の家にも遊びに行った。

本当に感じの良い両親で今日子が本当に心から両親に愛されて育て

られて来たのだと行く度にそう感じた。

私は家族の愛と言う物を知らない。

私の両親は仲が悪く父は母の他に女を作っていて殆ど家には帰ってこなかった。

たまに父が帰ってくると何とも言えない重い空気が家庭に流れる。

六畳一間の狭いアパートで私はそんな空気に押しつぶされそうになっていた。

そして、そんな時に何時も思っていた。

家族なんか要らない！こんな家族なんかいらないと・・・

私は家が嫌いであつた。家族愛なんて物も親の子を思う親心なんて物も信じていない。

そんな感じで成長したのだ。

「暖かい家庭で育った人間は幸せな家庭の作り方を知っている・・だから、この女ならきつと、暖かい家庭と言う物を作ってくれるに違い無い！」

私は幸せそうに笑う今日子を見つめながら当時、何度もそんな言葉を繰り返して呟いていた。

しかし、それは私の大いなる勘違いであつた。私が見た今日子の幸せな家庭は本当は今日子が作った物では無かつた。

そうだ、今日子の幸せな家庭は今日子の親が作り上げていた世界でしかなかったのだ。

今日子はただ、その作られた幸せな家庭と言う場所に居るだけだったのだ。

私はそんな単純な現実を当時、完全に見失っていたのだ。

運命の女などと勘違いをしていたのは付き合い始めて数ヶ月ぐらいまで、その後は今まで付き合いってきた女達と同じように別に好きでもなく嫌いでもなくそんなあやふやな気持ちの状態で付き合い合っていた。

そして、運命の日・・・

いや、私にとって人生最悪の日が訪れようとしていたのだ。

あれは忘れもしない7月16日の事であった。

実はね・・・

蒸し暑い夜であった。本当に風の無い蒸し暑い夜であった。

交際を始めて1年の記念日などと言われ私はその晩、六本木のとあるレストランで今日子を過ごしていた。

「ねえ、私達のこれからの事ってあなた、ちゃんと考えてくれているの？」

最近、今日子はデートの度に、この言葉を発する。正直、当時の私は運命の女などと言うくだらない戯言も殆ど忘れていた。

またかと思いながら私は適当な綺麗事でそんな今日子の質問を誤魔化していた。

「実はね・・・」

今日子が何時に無く神妙な顔で私にそう言った。

いやゝゝな予感がした。マジで・・・いやゝゝな予感が・・・

「実はね・・・」私にとってこの喋りだしの会話はあまり良い想い出はないのだ。

昔、好きになった女に旦那と子供が居る事を聞かされて長い不倫関係の始まるきっかけもこの言葉であった。

バツ3の子持ちの女を好きになり多額の借金を背負う事になった時も「実はね・・・」そんな言葉から始まる会話からであった。

女の実はね・・・程、怖い物はない。何時も私の悪夢はその言葉から始まって来たのだ。

「実はね・・・赤ちゃんが出来たみたいなの！」

突然の今日子のそんな言葉に一瞬、私はどのような表情をすれば良いのか迷ってしまった・・・

「そ・・・そう・・・」

そして、やっこの思いでそんな言葉を発するのであった。

「で・・・でも、君は子供が出来にくい体質ではなかったのかい？それに・・・」

そんな私の言葉に今日子是不機嫌そうに言った

「それに??それに何よ!」と

「それに僕達は付き合い始めて三回しか、体の関係を持って居ない

じゃないか・・・」

「何よ！それ・・・私があなたに嘘を言っていると言うの！私があなた意外の男の子供を妊娠したとでも言いたいわけ？し・・・失礼ね！計算してみてもよ！今、お腹の子供は三ヶ月なのよ！三ヶ月前に一泊二日で伊豆高原に旅行に行ったわよね！きっと、あの時に出来た子供だわ！」

何処が子供が出来にくい体質なんだ！私はそう怒鳴りそうになるのを必死でこらえていた。

避妊具を付けないでしたのはあの時が初めてじゃね・・・か！それも一回だけだぞ！

それとも計算された陰謀なのか？？お前・・・あの時、危険日だったんじゃない・・・かよ！

私はそう怒鳴りそうになるのを必死でこらえた。

「どうするつもりなのよ！私、おろすなんて可哀想な事出来ないからね！絶対におろさないからね！」

今日は今まで私が見た事も無いような剣幕でそう私を怒鳴りつけた！

周りの客達が私達二人を遠目で見ながら何やらヒソヒソ話をしていた・・・無責任なヒソヒソ話を・・・

「結婚しよう！責任はとるから・・・」

結局、翌月の8月8日の私の誕生日に入籍を済ませ、その年の11月21日私達は結婚式をする事になる。

「ここで皆様に驚きのサプライズのなご報告を！」

司会者が少しだけ興奮気味にそう言った・・・

「実は新婦のお腹の中には新しい命が既に宿っています！新郎！予定日は何月なんですか？？パパになる抱負を・・・」

まさか、こんなくだらない場面が自分に振りかかろうとは思って居なかった。

正直、出来ちゃった結婚なんて洒落にならない・・・

こんな話などはテレビの中だけの話だと思っていた・・・

そして、私は結婚前に子供なんかを作ってしまったアホな男を馬鹿にしていたのだ。

「来年の2月14日です・・・」

「なんと！バレンタインデーが予定日！きっと、生まれてくるお子さんは女の子ですね！」

そんなうでもよい司会者の言葉に私無理やりに笑顔を作ると幸せそうに笑った・・・

そしてそれは私の苦しみの日々の始まりの日でもあったのだ・・・

その時の私はそんな事に気づきもせず仲間から注がれるビールで完全に我を忘れながら笑っていた・・・

妄想と現実

男が名字を変える事は女と違う・・・

家を捨てるんだぞ！お前は・・・

一人っ子だろお前！お袋さん泣くぞ！この親不幸者が！！

私は婿養子になった・・・

今日子は一人娘であった。

「直ぐにとは言わないけど、出来れば「春風」を誠さんに継いでもらいたい。」

結婚の報告を今日子両親にしに行った席で今日子の母親は私にそう言った。

「店を継げと言われましても私には不器用な人間です！とても和菓子など作れるとは自分でも思えません！」

そんな私の必死の抵抗に今日子の母親は薄笑いを浮かべながら言った。

「別に誠さんに職人になってくださいと言っている訳ではないのよ！菓子造りの方は今日子が継いでくれるから、貴方には接客と経営をしてもらいたいので、でも、名字は坂本になって頂かないと困るわ！うちはお宅とは違うのよ！100年の歴史がある老舗の和菓子屋なの！坂本と言う名字を守っていかないといけないのよ！」

別に山田を捨てる事に抵抗があったわけでは無かった・・・

いや・・・もしかしたら私の心の中で本当は山田と言う名字を捨てたがって居たのかもしれない。

私は坂本と言う新しい名字と老舗の和菓子屋の後継者と言う肩書きと引き換えに・・・

多くの友人を失い、そして今まで私を必死に育ててくれた母を捨ててしまった・・・

結婚式の一ヶ月前、私に静岡に移動の辞令が降りた。

周りの人間たちは私の事を哀れだとヒソヒソ話を繰り返す・・・

・ 来月結婚するのに静岡に島流しかよ！せっかくここまで来たのに・・・

そんな声が聞えても私は別に何も思わなかった・・・

なぜかって・・・実はその人事を願い出たのは私、自身だったからだ。

私は逃げたかったのだ。今日子の母親は結婚したら直ぐに家に入るようにと私に言った。

私は土壇場になってビビッてしまったのだ！あの家の家族になる事を・・・

あの家の家族の一員になる事に・・・

「仕方が無いわよ！誠さん！お仕事を辞めるつもりはないの？別に今すぐにうちに来てもらっても良いのよ！」

今日子の母は言った。

二年は同居はしないからね！あなたの為なのよ！今日子ちゃん！あなたの・・・

多分、今日子の母親は実家の近くにアパートでも借りさせるつもり

で居たに違いない！

私はまんまと逃亡に成功したと言うわけだ！

今日子には散々、文句を言われたが結局は私達は静岡に引っ越す事になったのだ。

あれから6年の月日が経とうとしている。

その間にいろいろな事がわった。そしてそんな色々な事がある度に私は一つずつ自分と言う物を消して行った様な気がする。

私は何時の間にかロボットになってしまった。苦しみから逃げるために・・全ての苦しみから逃げる為に・・

そして幼い頃のように妄想の世界に自分の逃げ場所を作ったのだ。

幼い頃、私は何時も自分自身に言っていた！「本当の両親が外国に居て今に必ず僕を迎えに来てくれるんだ！」と私は幼い頃、何度もそんな妄想の中に逃げ込んでいた。

あいつらは本当の僕の親じゃないんだ！本当の僕の親は外国にいると・・・

親が何時しか恋人に変わり・・・そして今、私は本当の妻を心から待ち望んでいる。

外国に住んでいる本当の妻が私を迎えに来てくれる日を毎日、毎日待っているのだ！

幼い頃、毎日！毎日！羽田空港に本物を両親を迎えに行っていた！

何時間も！何時間も！出口で私は泣きながら出てくるはずもない両親を待っていた！

今、私はその時と同じ事をしている。

私は待ち続けているのだ！必ず現れる本当の妻の事を・・・

私が今日子を愛せない理由・・・

それは、本当の妻を愛しているから！何時か私を迎えに来てくれる
本当の妻を愛しているかだ！

だから・・・だから・・・私は今日子を愛せないのだ。

今夜も私は自分の携帯電話を1人見つめながら孤独な夜を過ごすの
だ・・・

鳴るはずのない本当の妻、「友美」からの電話を待ち続けながら・・・

離婚地獄

静岡に移り住んで二年後、私は軽いうつ病になってしまった。

慣れない土地での生活。そして自分が望んでいた家庭と言う物を上手く作れないもどかしさ・

いや、ある意味、妻と妻の母親の親子関係への嫉妬だったのかもしれない。

妻と母親の絆は私の想像以上に強く私などがとても入り込む事など容易に出来るような絆ではなかったのだ。

妻は何かと理由を付けては東京に帰省した。

二歳になる娘の葵を連れて月の半分以上は東京に帰りそんな妻を静岡の私の家に送ってきた母親は一週間は必ず私の家に滞在をした。

私と妻が二人になれるのは実質、一ヶ月の間に一週間も無かったのだ。

そんな状態でどうやって家庭を作れと言うのだろう・・・

正直、私にはどうしてもその方法が解らなかったのだ。

そして、生まれてから殆ど一緒に過ごす事が出来なかった娘に対してどうしても自分が彼女の父親であると言う自覚を持つ事が出来なかった。

孤独であった。自分の家なのに自分の家でないような・・・そんな気持ちで何時も居た。

妻の後ろに何時も居る妻の母親が怖かった。何か妻に言うごとに凄
い剣幕電話をしてくるあの女が・・・

いつの間にか私は妻に自分の感情を出す事を止めてしまった。

ロボットになれば苦しまなくて良い・・・何の感情も持たないロボットに・・・

私はうつ病の他にパニック障害も併発した。

家庭の重い空気に耐えられなくなると一人、トイレに入り頭を何度も何度も壁に打ちつけながら・・・

妻に悟られないように声を殺して泣いた。

そんな頃、妻の両親から仕事を辞めてそろそろ東京に戻って来てくれないか？と話があった。

あれは8月の蒸し暑い地域の花火大会の夜であった。

花火を見終わり帰宅すると妻は飲めない酒を少しだけ飲んだせいか直ぐに眠ってしまった。

「お母さん！お話があります！今日子さんと離婚をさせて貰いたいのですが・・・」

その時、私はなぜに離婚の事を妻に言わず彼女の母親に言ったのだろう・・・

正直、今でもなぜか自分自身でわからない。

妻に話すよりもどうせ自分では何も決められない女なのだから母親に話した方が早いと思ったのか？

いや・・・違う。きっと、あれは私の最初で最後のあの親子に対しての嫌味だったに違いない。

そんな話をしていると急に襖が開き妻が泣きながら飛び込んできた。

「離婚したくない！離婚しないで！！！」

私はその時、そんな妻を冷めた冷たい目で見つめていた・

結局、その騒動で私達家族はもうしばらく静岡に残る事になった。

しかし、一度、決意してしまった思いは消えず、私はそれから妻に
対してより冷たい態度をとったのだ。

今までの恨みを全て晴らすかのように・

あの花火大会から丁度、一年後、今度は私が妻の母親から離婚して
くれと言われた。

「あなたは最低の人間だ!」「この結婚は失敗だった」と・・

そんな母親に私は言った・・

「それは今日子さんの考えですか?」と

そして妻の顔を睨みつけながら同じ事をもう一度・・・

「それはお前の考えなのか?」と・・

妻は何も言わずにうつむいていた。それとは反対に妻の母親は敵意に満ちた目で私を罵倒し続けた。

「そうですか!別に離婚してもかまいませんよ!」

そんな私の言葉に妻はゆっくり顔を上げると目にいっぱい涙を溜め

て泣きながら言った・・

「やっぱり、離婚したくない・・」と

私にはこの女の考えがさっぱり解らなくなった。

結局、いろいろあったが5年も静岡に居る事になった。離婚の話はあれ以来、話して居ない。

妻の母親は相変わらず、月に一度、私の家に現れる。さすがに娘が幼稚園に行き始めると妻の帰省は減ったが

娘の幼稚園が長い休みになると必ず実家に帰省している。

わたしは今、この女と結婚した事を後悔してる。

正直、妻が悪いのではない、きっと、私が悪いのだ。

嘘から始まった生活はきっと最後まで嘘なのかもしれない。

結婚・・・人間はたとえ一瞬でも愛した相手と結婚するべきだ。

きっと、私は一度も妻を愛しいと心から思った事など無かったのだと思う。

一瞬でも愛しいと思った女と男は結婚するべきだ。

なぜなら、その一瞬の感情が心の支えにきつとなるのだから・・・

私はますます、妄想の世界に逃げ込むようになった。

本当の私の妻が何時か必ず私を迎えに来ると・・・そんな妄想の世

界に
・
・

初恋の女

あなたは運命の出会いと言う物を信じますか？

私は本当はこんな状態になった今でも信じているんです。

運命の相手が本当に居る事を・・・

それはある日曜日の午後だった。

私は電気売り場のカウンターに立っていた。

すると私を凝視する妙な視線を感じた。

ふと、その視線の方を見ると一人の女が立っていた。

年の頃は40代だろうか？私と同じぐらいの年のように見えた。

しかし、容姿は40代とはとても思えないほど美しく30代でも通じるくらいだ。

彼女の視線が妙に気になった。

しかし、どうする事も私には出来なかった。

何か私に御用ですか？もしかして私に好意をお持ちで？？

なんて話しかけたらきつと、彼女はキョトンとした顔をしながら言うだろう・・・

「えっ？テレビが欲しいんですけど？？」なんて・・・

だから、私はこう言った・・

「お客様！何かお探しですか？？」とすると彼女は私の顔をじっと見つめ決意したように言った・・

「もしかして・・山さんじゃない？？」と・・

山さんと言われ今度は私の方が彼女の顔をジット見つめてしまった。

私の事を山さんと呼ぶ女・・

山さんとは私の小学校時代のあだ名である。中学、高校と誠と呼ばれていたので、私のこのあだ名を知っているのは小学校時代の同級生に違いない。

私は彼女の顔をじっとさらに見つめた・・

「う．．．臼井か?？」

そんな私の言葉に女は少しだけ微笑みながら．．．

「あら、良くわかったわね! 29年ぶりなのに．．．」と言った。

「それはお互い様だろ! 君も僕と会うのは29年ぶりじゃないか．．．」

臼井カオル．．

私は今でも彼女の小学生時代の顔を時より思い出す事がある。

私の初恋の相手．．．

いや、私が本気で愛した最初で最後の女なのかもしれない。

私はそう言いながらゆっくりとカオルの足元を見つめた。

カオルの足にすがり付くように小さな男の子が立っていた。

結婚しているのか？当たり前だよな・・・

結婚してるのか？

そう喉まで出たがそんな言葉を何とか無理やり飲み込んだ。

「へえー山さん！このお店の店長さんなんだ！偉いんだね！」

カオルは私のネームプレートを見ながらそう言った。

「別に偉くなんてないさ！長く勤めていれば誰でもなれるんだ！店長なんて！」

「あら、そうなの！でも、偉いわ！あなたは昔からしっかりしていたから！」

私は別にしっかりなんかしていなかったよ！ただ、君の前ではそう見せたかっただけさ！

私はそんなカオルの言葉にどう答えて良いか解らず接客用の営業スマイルで言った。

「何時でも来てくださいね！お待ちしております・・・」と

「えっ！あ・・・あ・・・そうね！私、この店の近くに住んでいるのよ！また、ちよくちよく買い物に来るからね！」

「お待ちしております！」

私はそう言いながら深々と頭を下げた。

初恋の相手って男にとっても女にとってきっと特別な存在だと思う。

もしかしたら、初恋の相手が本当は運命の人なのかもしれない・

生まれて初めて愛した相手だから・・・

カオルはそう私に言うとうつ男の子の手を引きながら歩き出した。

「う・・・白井！」

私は思わずそう叫んでしまった！

「う．．．臼井で良いのか？今の名字は？？」

そんな私の言葉にカオルは笑いながら言った。

「臼井で良いわよ！あのね！私、離婚したの！シングルマザーって奴！いろいろあって東京に居れなくなってしまっただけ！この町に越して来たの．．．」

でも、この町に決めて良かったわ！」

「何でだい？？？」

「えっ！だって．．．山さんにもう一度会えたから．．．」

「それは光栄だね！定休日以外は大体、一日中、店に居るからさ！また、来いよ！」

「うん！また来る！」

カオルはそう言いながら小学生の時と変わらないあどけない笑顔で
そう言った・・

それがカオルとの29年ぶりの再会であった。

地獄の扉は開かれた

愚かな人間は結局は何時になっても愚か者から抜け出す事は出来ない。
い。

結局、いろいろ人間に迷惑をかけながら普通の人間になりたいとも
がくが欲望に負けてしまう。

私もきっとそんな人種の人間であると思う。馬鹿な大人なのだ。

しかし、そんな人間に限って弱い人間で孤独に耐える事が出来ない。

人との関わりが嫌いで妻や家族と上手くコミュニケーションが取れず
自ら孤独な世界を望んでいるくせに

実は孤独である自分に恐怖しているのだ。

私もそんな人間であつた。

カオルを食事に誘つたのは彼女が4回目の来店の時であつた。

「よかつたら飯でも食いに行かないか？」

突然のそんな私の誘いにカオルは少しだけ周りを気にして声をひそめて言う。

「それってもしかしてデートの誘いかしら？」と

私は少し動揺しながらカオルに言った。

「えっ・・・いや、別に特別な感情は無いんだ！ただ、懐かしくってさ！昔話も良いかと・・・」と

「そう！でも私、息子がいるからね！あの子を一人残して外食は無理なのよ！」

私は予想していた答えに少しだけ落ち込んだ。

そんな私の落胆振りが目に見えたのかカオルは言う

「なら、うちに来ない？息子は早く寝てしまうから・・・寝たらゆっくりにお酒でも飲みながら昔話でもしようよ！」と

「でも・・・大丈夫か？息子さん・・・俺なんか行って・・・」

「別に！結構、山さんの事はお気に入りみたいよ！」

「そうか・・・なら・・・」

そんな感じで私はカオルの家に夕食に招かれる事になったのだ。

カオルとそんな話をした3日後、私は私の店から10分ほど行った所に最近建てられた高層マンションの前に立っていた。

「すげーマンションだな・・間違ってないよな??」

そのマンションはとても最近離婚したばかりの女が住めるような建物には私にはどうしても思えないくらい豪華なマンションであった。

私は二度ほど辺りを見まわしたが「キャッスル広小路」などと言う名前の建物はやはりその高層マンションしか存在しなかった。

入り口に入るとオートロックになっており私はカオルから聞いていた部屋の番号を押すとチャイムボタンを押す。

「はい！あら、遅かったわね！約束は6時だったと思うけど?」

「すまない！少し道に迷ってしまった！」

「そう！遅いから少し心配しちゃったわ！今、ドアを開けるから・・」

しばらくすると入り口の自動ドアが開く。私は開かれたドアの入り口に向かった。

本当は迷っていたのだ。道に迷っていたわけで無く。私は迷っていた。

本当にカオルの家に行って良いのか私は迷っていたのだ。

なんとなく開かれた自動ドアが私には地獄の扉に感じられた。

地獄の扉は開かれた・・・

そして、私はこの扉の向こう側が地獄だと解っているのに歩き出してしまった愚か者であった、

小さな親友との出会い

「いらっしゃい！」

玄関のチャイムを押すと開かれたドアの向こうにはそう言って笑顔で微笑む1人の女が立っていた。

その足元には何時ものごとく1人の男の子が不安そうにその女の足にしがみつくように立っていた。

「ああ・・・お邪魔します！あつ！これ、ケーキを買って来たんだ！結構、ここのチーズケーキは美味いんだぜ！」

そんな私にカオルは少しだけ嬉しそうに言った。

「あら、私がチーズケーキが好きなのよく覚えていたわね！」と

私はどうでも良い事を良く覚えているのだ。本当に大切な事は直ぐに忘れてしまうくせにどうでも良い事は覚えている。

私が小学生の頃、一度だけカオルの家に遊びに行った事があった。別に私1人が招かれた訳では無かったのだが多分、彼女の誕生日会だったと思う。

カオルの家は金持ちで・・・いや、今、考えれば普通の家だったのかもしれない。しかし、当時、6畳一間のボロアパートに住んでいた私には一戸建てに住んでいる人間は全て金持ちに見えたのかもしれない。

その時、出されたのがショートケーキではなくチーズケーキであった。

その時、私は初めてチーズケーキと言う物を食べた。そして、「私ね！チーズケーキが大好きなのよ！」なんて万遍の笑顔でチーズケーキをほうばるカオルを可愛いと思った。

「えっ？そうだったか？偶然だろ・・・」

「あら、そうなの少しかかり！山さんなら覚えて居てくれたと思っただのに・・・」

そんな私の照れ隠しの言葉に少しだけカオルは悲しそうな顔をした。

家間取りは4LDKでとても豪華な物であった。私が住んでいるマンションとは大違いである。

離婚した女に必死に毎日、働いている私がかかわらないのか？と少しだけ落胆した。

随分と贅沢な家なんだな！君の元旦那さんは偉い金持ちだったんだね！離婚の時に大分金をもらったんだね！羨ましいよ・・・

なんて心の中で嫌味の一つも言いたくなるような贅沢な家であった。

しかし、その数分後、私はそんな嫌味の言葉を口に出さなかった事に胸をなでる事になる。

居間のソファーに腰掛けるとカオルの携帯電話がけたたましく鳴った。

「はい！私！今夜は大切なお客様が来るから連絡はするなど言っておいたと思うけど？？」

そんなカオルの言葉に電話の相手は何事が重大な話をしているようであった。

時間が過ぎるにつれカオルの表情がドンドン険しくなっていく。

「あのね！そんな事ぐらい私が居なくてしてちょうだいよ！それで、私にどうしてもらいたい訳？」

きつと、カオルは電話の相手の次の言葉が解っていたに違いない少しだけすまなそうに私に一瞬視線を送った。

「解ったわ！直ぐに行くわ！」

そう言うときカオルは不機嫌そうに電話を切った！

「山さん！御免なさいね！急な仕事が入ってしまったの！取引先とトラぶった見たいでね！本当にボンクラばかりで・・・でも、仕方ないわね！自分の会社だからさ！」

自分の会社？？その時、私はこの夢のような生活をカオルは自分の手で維持してる事を初めて知った。

「仕方が無いよ！今夜はこれで失礼するから！私の事は気にしないで・・・」

そう言いながら立ち上がりとする私をカオルはよりすまなそうに

見つめ言った。

「山さん！夕食の仕度は全部終わっているの！極上のワインもご用意させて頂いたのよ！」

「だから？？なんだい？？」

そんな私の言葉にカオルは少しだけすまなそうに・・・

「悪いけど、啓太を見てくれないかしら？何時もなら会社の人間に面倒を頼むんだけど今夜は急なので・・・」

この子と一緒にご飯を食べてくれると安心なんだけど・・・」

そう言いながらカオルはおどけたように舌を出す。それも小学生の時からの変わらない癖であった。

私は一瞬、怪訝な顔をカオルの息子に視線を送る。

そして一つの謎が解けたような気がした。きっと、彼は殆どの時間を他人か1人で過ごしているに違いない。

だから母親が居る時は何時も不安そうな顔で母親の足にしがみついて居るのだ。

だから・・・

「解ったよ！啓太君！おじさんとママが帰ってくるまで遊んでくれるかい??」

私はそう笑顔で啓太に言った。

彼は少しだけ考えたような顔をして私に小さく頷いた。

「御免ね！私、もう行かないと！適当にやっついて！そんなに時間はかからないと思うけど！」

私と啓太がそんなやり取りをしている隙にカオルは化粧を済ませスーツに着替えていた。

「ああ・・・気にしないで！今夜は遅くなるつもりで来たから・・・」

遅くなるつもりで来たから・・・

そんな私の言葉にカオルは少しだけすまなそうな顔をした。

「それじゃ行くから！啓太！このオジサンの言う事をちゃんと聞くのよ！解ったわね！」

母親のそんな言葉に啓太は無言で小さく頷いた。

カオルはそう啓太に告げると何かに追われるように急ぎ足で家から出て行った。

何とも微妙な静寂が私を襲った。

オヤジやおばさんとこんな状態になる事は合ってもこんな4歳の子供と二人きりになるのはさすがの私も初めてあったのだ。

ただ、一応は私もダメ父であるが父親である。なんとなくであるが自然と子供とのコミュニケーションのとり方を心得ている。

不安げに私を見つめる啓太に私は言った。

「君！お風呂には入ったかい？」と

啓太はそんな私の突然の申し出に少しだけ唾然としながら首をゆっくり横に数回振った。

これが私と啓太の初めての出会いであったような気がする・・・

私の小さな親友との・・・

人生は辛すぎて私の手には負えない

私は何となく重い空気に耐えられなくなりチラット時計を見た。

時間は既に11時を少しまわっていた。

「そろそろ帰るよ！こう見えても家庭持ちなのでね！」

そんな私の言葉にカオルは少しだけ寂しそうな顔をした。

「そう、今日はごめんなさいね！急な仕事が入ってしまって・・・」

「別に構わないさ！食事、美味かったよ！ご馳走様！」

私はそう言いながら上着を羽織ると玄関に向かい歩き始める。

ずっと・・・私の右手に暖かい温もりが伝わった・・・

「昔と全然変わらないね！誠は・・・」

そうカオルは弱々しく呟くように言う。

「変わっていない？そんな事はないよ！僕だって僕なりに人生経験を積んでいる。」

「いや・・・変わっていない！あなたは今でも小学生の時のままだわ！優柔不断の意気地なしなもの・・・」

カオルのその言葉の意味と私の右手を優しく握る手の温もりの意味を私は十分過ぎる程、きつと、解っていた。

でも、私は振り返る勇気が無かった。

本当だ！カオル・僕はきつと何も変わって無いんだ！小学生の時、君の家の玄関のチャイムを押せずに居た僕と何も変わっていないのかもしれない・・

「帰るよ！」

そう私が呟くように言うと私の背中にカオルは抱きつきながら・・・

「もう待てないんだよ・・・」と言った。

私は我慢出来ずに振り返るとカオルは私の唇に優しくキスをした・・

その時・・・

「ママ！帰って来たの！！」

不意に啓太のそんな声が聞こえた！

目を擦りながら眠たそうに啓太は自分の部屋から玄関に歩いてくる。

カオルは焦ったように私から離れた・・

「あっ！誠ちゃん！ダメじゃないか！ママをいじめちゃ！泣いちゃってるぞ！女の子には優しくしないといけないんだよ！ママをいじめる誠ちゃんなんか嫌いだよ！」

啓太は怒ったように私にそう言う私をにらみつけた。

「啓太！違うのよ！ママね！悲しくて泣いているんじゃないのよ！ママ・・嬉しくて泣いているの！」

だって誠君は大切なママのお友達だし、それに啓太もお友達になつてくれたんだもんね！

だから、嬉しくて、嬉しくて！泣いていたの！」

そんな母親の言葉に啓太は笑顔になり私に言う

「誠ちゃん！また、遊びに来てね！」と

私は笑顔で啓太に言った。

「そうだ！今度はママと3人で動物園に行こうよ！」と

そんな私の言葉に啓太は嬉しそうに笑った・・

私はカオルに一度、頭を下げると静かに玄関を開いた。

「約束よ！啓太との約束・・絶対に守ってよね！」

そんな私の背中に向かいカオルはそう呟くように言う。

「ああ・・・また、連絡をするよ！」

静かに私はそう言いながらドアを閉めた。

泣いていた・・・私は閉められたドアの前で啓太のあの嬉しそうな笑顔を思い出し泣いていた・・・

私は自分の娘にあんな笑顔を見せてあげた事が合っただろうか？？

私はきっと、ダメな父親なのだ！自分の子供にあんな笑顔をさせる事もしないで・・・

他人の子供に万遍の笑顔を与えている。

「ごめんな！ 葵・・パパはやっぱりダメ父だな！ お前とも行こうな！ でも、ごめん！ ママと三人では行けないよ！

ごめんな！ 葵！ 本当にごめん・・・」

私はそう呟くと目にいっぱい溜まった涙をハンケチで拭い静かに歩き出す。

マンションの入り口を出ると夜空に万遍の星が輝いていた。

「綺麗だな！こんなに星が見えるんだな！ 今まで気がつかなかったよ！」

・
そう言いながらタバコに火をつけると私は夜の暗闇に消えて行った・

人生は辛すぎて私の手には負えない・・

そんな言葉を呟きながら。

小さな親友の孤独

「お風呂場は何処だい？案内をしてくれるかな？」

そんな私の言葉に啓太はまた無言で小さく頷く

「あっ！まずは自己紹介からだったね！オジサンの名前は坂本誠と
言います！君の名前は？」

そんな愚問に啓太は少しだけ微笑を浮かべ！

「啓太だよ！知ってるくせに！」と言った

「そうか！啓太君だったね！失礼！オジサンは君のママのお友達だ！小学生の頃からのね！だから君ともお友達になりたいんだけど・・・どうだろう？オジサンとお友達になってくれるかな？」

そう私が言っていると啓太はより嬉しそうな表情を浮かべ「別に・・・良いよ！」と言った。

おかしなものだ、私は自分の娘にこんな感じで話をした事など一度も無いのに他人の子供には善人を演じられる。私はきっと、生まれながらの詐欺師なのかも知れない。本当はきっと、この子と友達なになりたいと思って居ないくせに笑顔で・・・それも飛びっきりの笑顔でそう言えるのだから・・・

子供などと馬鹿にしては居ない！子供の方が大人よりも人間の偽善を巧妙に見抜く事を私は知っているから・・・

私もそんな子供であった。もしかしたら啓太自身、そんな私の気持ちなど最初からお見通しだったのかも知れない。子供は子供なりに生きる術を見に付けているに違いない。

・特に彼のように何時も他人と一緒に居る事を強いられている子供は・

なんとなくそう思うと楽しくなった！さあ勝負だ！啓太君！僕は

結構手ごわいぜ！私はそう心の中で呟くと浴室に向かう彼の後を追った。

カオルはきちんとした性格なのだろう浴室は綺麗に清掃されていた。最新の浴室の使い方に少しだけ戸惑いながら啓太と一緒に浴槽に湯を入れた。

啓太は少しだけ恥ずかしそうに洋服を脱ぎ始める。

そして私も・・・しかし、なんとなく服を脱ぐ度に啓太の表情が子供に戻って行く気がした。

なんとなく気を張っていた子供なりの大人の顔から4歳の子供の表情に・・・

先にシャワーを浴びて私が浴槽に入ると啓太は少しだけ困惑した顔をした。

「おい！啓太！早く入れよ！風邪引いちゃうぞ！」

私はあえて砕けたような言葉を使ってみた！

「う・うん！」

啓太はまだ、困惑した顔をしている！

「お前と俺は友達だって言っただろ！遠慮するんじゃね〜YO！」

そう言いながら私は風呂のお湯をバシヤと啓太に一度かけた！

「アツ！！！！何すんだよ！やったな〜！！！」

啓太は嬉しそうにそう言う！浴槽に飛び込み今度は私にお湯をバシヤっとかけた！

男の子は良い！娘とはやはり違う。男同士と言う言葉があるが、男には男にしかわからない微妙な関係がある。

そう言えば私は殆ど、娘とこんな感じで一緒に風呂になんか入った事が無いような気がした。

たまに入ってもめんどくさそうに娘を叱ってばかり居た気がする。

なんとなく葵に申し訳ないような気持ちになった。

「洗ってやるよ！出な！」

私は啓太を風呂から出すとタオルにボディークリームをたっぷり付けて彼の背中を洗った。

なんとなく啓太は嬉しそうに・・・「くすぐったいよ! 誠ちゃん!」と笑いながら言った。

子供の笑顔はなんとなく汚れた私の心を洗い流してくれるような気がする。

薄汚れた私の心を・・・啓太の屈託の無い笑顔は私の孤独な心を洗い流してくれるような気がした・・・

本当は葵がそうしてくれるはずなのに・・・そして、本当は娘の葵の背中をこんな笑顔で洗ってやらなくていけないのに・・・私は本当にダメ父なのかもしれない。

人間は不思議だ何で他人には優しくなれるのだろうか? 何で・・・自分の家族に本当は啓太に向けた優しい微笑を向けてあげなくてはいけないのに・・・

「今度は誠ちゃんの背中を洗ってあげるよ!」

啓太は私からタオルと奪い取ると私の背中を必死に洗い始める！」

「オイオイ！大丈夫か？？」

「大丈夫だよ！初めてだけど！出来るもん！僕にだって・・・でも、ママのお友達で僕と一緒に風呂になんか入ってくれたの誠ちゃんが出来てだよ！何時も、皆、ママが居なくなると怖い顔になるんだ！そして何も言わないでソファで本を読み出すんだよ！僕、本当は嫌なんだ！ママのお友達と居るより1人の方が楽しいから！」

でも、誠ちゃんは違うね！初めてママのお友達と居て楽しいと思っただよ！」

私はなんとなく啓太に申し訳ないと思った。

私は・・・いやきつと、今まで彼に接して来た全てのママのお友達は決して彼に感心など無かったに違い無い。

それは私も同じだったのだ。関心あるのは彼の母親にで彼女のご機

嫌取りに彼を道具として使っているに過ぎないのだから・

「だって俺たちは友達だろ！」

私はそんな思いを振り切るかのようにそう大きな声で言った！そう
だろ！俺たちは友達だろ・・・と

ドボン！！

啓太はそんな私の言葉に恥ずかしそうに浴槽に飛び込む事今度はバ
シヤと私にお湯をかけ笑いながら言った！

「お友達って良いね！」と

私はそんな彼の言葉に無言で小さく頷いた。

それから風呂から出ると二人で用意されていた豪華な夕食を食べた。

笑いながらくだらない話・・・どうでも良い話し・・・啓太は自慢げに幼稚園の話をした。

自分は結構モテルのだと言う。女の子から3人も好きだと言われたと自慢げに話す・・・

何気ない話が出来る事が、どうでも良い事が気軽に話せるのが家族なのかもしれない。

私が探している幸せな家族の姿・・・もしかしたらそれは、こんな単純な事なのかもしれない。

「チーズケーキ食べちゃおうか！」

そう私が言うと啓太は「ダメだよ！誠ちゃん！ママが1人で食べないといけなくなるだろ！」と

「そうか！すまない！」

一瞬、時計に視線が行く・・・時間は9時を少しだけまわっていた。
あいつ随分と遅いな・・・

「そろそろ寝る時間では無いのかい？」

「えっ・・・う・・・うん！そうだけど・・・今夜は寝たく無い！」

「何で？？もう、眠いだろう？？」

「だって・・・だって・・・眠ってしまったら誠ちゃん！帰ってしまう
んでしょ！だって・・・」

悲しげに啓太は私をそう言いながら見つめた。

だって・・・消えてしまうんでしょ・・・寝てしまったら、消えて・・・

「一緒に寝ようか！オジサンと！」

「えっ・・・本当に？？」

「ああ・・・本当さ！僕は後片付けをするから啓太はパジャマに着替えてきなよ！1人で着替えられる？」

「当たり前だろ！何時も1人で着替えているもん！」

なんとなくそんな大人びた言葉が寂しく思った。

この子は子供ながらに色々な事をきつと、我慢しているに違いない！きつと、沢山の事を・・・

なんとなく「着替えられないよ！」なんて泣いている娘の姿を思い出す・・

きつと娘は幸せなのだ・・我俣を言えるのだから・・きつと、幸せなのだと思った。

「さあ、寝よう！オジサンはパジャマが無いからシャツとパンツいっちょだ！・！・！」

そう言いながら洋服を脱ぐと啓太は嬉しそうに私に抱きつく。

「高い高いしてよ！寝る前に！そうしたら言う事を聞いてあげる」

高い高い？？？そんなくだらない事・・嫌だよ！

「すげーーーーーーーーママはあんまりやってくれないからさ！重いんだって！僕・・・パパだったら・・・」

啓太はそう言いかけて慌てて口をつぐんだ・・・

子供は子供なりに言っではいけない言葉を知っている。きっと・・・

私はなんとなく切なくなりもう一度啓太の両脇を掴むと一気に持ち上げた！

「これで寝るんだぞ！約束だからな！」

「うん！誠！ありがとう・・・」

「ああ・・・別に・・・」

一緒にベットに入るといつの間にか私の寝てしまった。

不意に体が揺らされ私を呼ぶ女の声・・・

「山さん！起きて！起きてよ！」

朦朧として目を開き時計を見ると10時を少しだけ過ぎて頃であつた。

「あっ・・・ごめん！寝ちまった！お帰り！お疲れ様！」

「私の方こそ！ごめんね！どう？一杯飲まない？？」

そう言いながらカオルはリビングに向かい歩き出した。

私はパンツ一枚なのを忘れそのまま彼女の後を追った。

「ありがとうね！本当に・・・あの子のあんなに幸せそうな寝顔を見るの久しぶりよ！」

「いや・・・別に良いんだよ！」

「あと・出来ればシャツとズボンを履いてもらえると助かるんだけどこれでも一応は独身だから・・・」

そうカオルは視線を床に向けながら照れたように言った。

待っていたの・・・あなたを

私がシャツとズボンを履いている間にカオルは手際よく簡単につまみとワインを用意した。

部屋の電気は消されテーブルの上には三本のろうソクが灯される。

「何に乾杯するのかしら?？」

そんなカオルの言葉に私は少しだけ照れたように・・・

「幼い時の思い出に・・・」と言った。

少しだけ酔いが回り始めるとなんとなく二人ともあの頃に戻っていた。

小学生のあの頃に・・・

「山さんはさ！あの頃、好きな子とか居たの？」

そんなカオルの質問に私は冗談ぽく・・・「お前だよ！お前が好きだった！」と言ってみる。

カオルは少しだけ言葉を選ぶような感じで言った。

「やっぱりね！」と

「何だよ！それ・・・驚かないんだな？」

「えっ・・・だって知っていたもん！山さんが私の事好きなこと・・・」

「冗談に決まってるだろ！嘘だよ！嘘！！そうだ！俺は田中が好きだった！田中香知ってるだろ？」

「相変わらずあなたは嘘が下手ね！それは小学生の頃からまったく変わっていない。」

「なら、何時から解っていたんだ？俺がお前を好きだって事・・・」

「そうね・・・出会った頃からかしら、小学一年生の時に私のお母さんとあなたのお母さんと4人で写真を撮ったでしょ！入学式の朝だったかしら？あの時から・・・」

「冗談だろ！なら、6年も知ってて知らん振りをしていたと言うのか？」

私はカオルの鋭い指摘に一瞬動揺した。

「なら、知っていてお前の方から何も言わなかったって事はお前は俺の事なんか眼中に無かったって事？」

カオルはそんな私の表情を楽しむように微笑みながら私を見つめていた。

「待っていたのよ！私はあるあなたの勇気を待っていたの・・・」と

勇気を待っていた？私の勇気を・・・

「卒業してさ！私立の中学に行った私の家の前で山さん！しばらく毎朝、立って居たでしょ？」

私は少しだけうろたえた。

カオルは何も言わずに私達と違う道を選び歩き出したのだ。本当に誰にも何も言わずに・・・

カオルは私立の中学に進学した。そして私は地元の公立中学に進学

した。

なぜに私はあんたくだらない事をしたのか今でも理由が解らない。

学校が始まってしばらくの間、私は学校に行く前にカオルの家で立っていた。

きつと偶然の出会いを期待して居たのだと思う。

カオルが通学する為に家を出た時に偶然に出会う瞬間を・

私は何をする為に毎朝、カオルを待っていたのだろう・・そしてなぜに一度もカオルに会う事が出来なかったのか？

私はあの時、告白したかったのか？ いや・・多分、違う！ 私はただ、カオルの顔が見たかっただけに違い無い。

「お前知っていたのか？」

「あのね、あれだけ毎日、家の前に立たれて知らない方が不思議よ！」

「なら、何で出て来なかったんだ・・・」

そんな私の言葉にカオルは少しだけ真剣な表情で言った。

「待っていたの！あなたが私の家の玄関のチャイムを鳴らしてくれるのを・・・」と

私は一瞬、目の前が真っ暗になった・・・待っていた。その意味がやっと理解できた。

次の言葉が見つからなかった。次の言葉が・・・

私がやっと、思いついた言葉は・・・

「お前・・・何で離婚したんだ？」なんて戯言・・・私はまた、この女から逃げてしまった・・・

佐藤勇作と言う一流作家

「お前なんで離婚したんだ？」

そんな私の言葉にカオルは少しだけ顔をしかめ呆れたような表情をした。

「私が何で離婚したか知りたいの？」

「ああ・・・知りたい。」

「あのね！私が彼に出会ったのは大学3年生の時だった。彼は文学部で小説同好会に入っていた。学園祭で偶然に彼の小説を読んでね！なんとなくファンになったの。寡黙な人だった。そして誰かサンと同じで生きる事に不器用な人だった。なんとなく付き合うようになった。別にどちらから告白した訳でもないのにいつの間にか私達はお互いが必要な存在として認めていた。私は大学を卒業してある広告代理店に就職した。彼は小説家になるんだとそのままフリーターになった。彼がアパート追い出されて何時の間にか私のアパートに転がり込んで来て同棲生活が始まった。広告代理店でさ！私は店のチラシを構成する部署にまわされて色々な店を見てまわった。

良い店、悪い店・・・本当に沢山の店を・・・

いつの間にか私にも良い店と悪い店の区別が自然と出来るようになったの！

そうしたら、何か繁盛してる店のオーナーでもたいした事が無い人間が多いのよ！なんとなく私でも出来るような錯覚をしたの・・・広告代理店に4年ほど居て私はその会社を辞めた。商売をする為に・・・

彼は何度もコンテストに応募していたけど一度も選ばれる事は無かった。

何て言うのかな？彼の小説が売れる瞬間がさ！私の生きる希望って言うの？そんな物になったの・・・

私は必死で働いたわ！小さな店から頑張って2号店を出して3号店を出して・・・そして今の地位を手に入れた。」

「悪い！カオルってさ！社長なわけ？？」

「そうよ！マカルって知ってる？」

マカル・・・マカルと言えばディスカウント業界のナンバーワンの店

じゃねーかよ！

「あ・・・あなたはマカルの・・・し・・・社長さんなのですか？」

私は思わずカオルの呼び方をお前からあなたに変えてしまった・・・

「そうよ！私の店よ！マカオは・・・」

思わず私は絶句した。そして自慢げに自分が店長である事をカオルに話した事を後悔した。

なぜなら、私が勤める店は業界では中堅クラスでとてもマカオに太刀打ちなど出来る店は無かったからだ。

「山さん・・・話を続け良いかしら？」

「その山さんって呼び方は止めてくれないかな？なんかこそばゆく
ってね！そうだ、誠で良いよ！誠で・・・」

「そう、誠ね！それじゃー誠！話しの続きを・・・」

彼と同棲を始めて10年後に私達は正式に籍を入れた。丁度ね！私の会社が東証一部に上昇した年だった。

私なりに嬉しかったわ！10年も一緒に暮らしてはいたけどやはり今までは彼氏だったから、私は彼の妻になった事でよい献身的に彼を支えようと決意したの！それから5年後に啓太が生まれた。

ねえー誠、良い妻の条件って何だと思う？」

そんな突然の質問に私は沈黙した。

そんな私を見つめながらカオルは笑いながら言った。

「解らないでしょ？実は私にも解らないの？なら、よい旦那の条件
って何？実はそれも私には解らない！

もしかしたらそんな物は存在しないのかもしれないわね！

私は良い妻になろうとしたわ！仕事も家庭も絶対に手を抜かなかった。彼にはそんな私の想いって言うのかしら

それが解っていると思っていた・・・

それから2年後にね彼の作品がある出版社の新人賞を取ったの、嬉しかったわ！正直、3人でお祝いしたの！

羽田の小さなレストランで、若い頃ね！何時か成功したら来ようと二人で約束した小さなレストラン・・・

きつと、あれが最初で最後の幸せだったのかも知れない。

次の年にね！彼の作品が芥川賞の候補になってね！彼、それ取ったのよ・・・」

今から2年前の芥川賞の受賞者？？？誰だっけか？誰・・・あっ！そうだ・・・佐藤勇作・・・勇作だ！

「君の元旦那ってあの佐藤勇作なのかい？」

「あら、良く知ってるわね！」

「佐藤勇作と言ったら受賞以来、次々とベストセラーを連発している作家じゃないか？」

「そう・・・その佐藤勇作が啓太の父親・・・でも、あんなもの本当は取れない方が良かったのかもしれないわ！」

芥川賞を取った事で私達の生活は変わってしまった。」

「変わったとは??？」

「何ていうのかしら？目標が無くってしまったと言うのかしらね！私の生きる目標が・・・」

私は彼が一流に小説家になる日の為に必死で生きてきたの！それなのにそれが達成されてしまった。

なんとなくそうなると彼って人間に何も魅力が無くってしまったと言うのかしら？

彼は私に仕事を辞めろと言った！辞めれる訳が無いわよね！1000人以上の従業員が居るのよ！辞めれる訳が無いわよ！でも俺が前達を食わせるから辞めろと言ったの・・・

正直、こいつ何言ってるの？って思ったわよ！今まで誰のおかげで生活出来てきた？誰のおかげで売れもしない小説が書けていたのか？ってね！

そうなってしまおうと男と女ってダメね！何時も思っていた！彼を見ながら・・・

この私の前に座っている男は一体、誰？？ってね！私は何でこんな男と一緒に暮らしているのかと・・・

ねえー誠！さっき良い妻の条件の話をしたわよね！なんとなくだけど最近、解って来たのよ！

良い妻の条件は自分を持たないって事・・・旦那に合わせられる女がきつと、良い妻なんだと思う・・・」

そんなカオルの言葉に私は言った

「なら、良い旦那の条件も同じなのかもしれないな！」と

カオルはそんな私の言葉に小さく頷いた。

「それから色々あってね！結局、離婚してしまった。彼、啓太の親権は要らないって言ったの！多分、女が居たんだと思う・・・そうあいつに言われた時に全ての迷いが消えたわ！別れようと・・・」

カオルの目はうつすらと涙で濡れていた・・・

結局、男と女が別れるのに理由など無いのかもしれない・・・結局は無いのかも・・・

私はろうそくの炎の向こう側に見える美しい初恋の女を見つめながら何とも言えない気持ちになった。

復活・たぶん

そろそろ帰らないと…

それは私がやっと探しだした言葉であった。

そろそろ帰らないと…

そんな私の言葉をきっかけに二人は現実の世界に戻された。

私はゆっくり立ち上がると帰り支度を始める。

そんな私をカオルはただ無言で見つめていた。

私はそんなカオルに話しかける事もなくその場から逃げるように玄関に向かった。玄関で靴を履き背後にあるカオルの気配を少しだけ恐れながらゆっくりと振り返る。

目の前にカオルの少しだけ寂しげな顔が目に入る。

何も変わらない美しい顔…ただ1つだけ違ったのはカオルの顔は女の顔に変わっていた。今までの幼馴染みのあどけない顔から私が今まで見たことが無いような大人の私が次にしなければいけない行為を待ちかまえているようなそんな大人の女の顔に。

一瞬の沈黙…

カオルは私の心の中を全て見透かしたように私の顔に自分の唇を近づけた。

ヤバイ…地獄に堕ちる…

それも良いか…

こいつとなら…それも良いか…

そう私の心が呟いた瞬間…ママ！ママなの！

啓太の嬉しそうな声がした。

その瞬間…

カオルの顔は淫靡な大人の顔から温和な母親の顔に変化する。

私は自ら顔を反らし啓太の部屋の方を見つめた。全てを捨てる勇気を持ってしまふ事がきつと怖くなったから…

そんな私をカオルは少しだけ呆れ顔を見つめながら…啓太！ただい

ま！おじさん帰るんだって！と言った。啓太の走って来る足音が聞こえる：

誠ちゃん！！ママと3人で今度は動物園に行こうよ！

私はそんな啓太の言葉に一瞬、カオルを見つめた。

カオルはそんな私に小さく頷いた。

全てを捨てる勇氣を持ってしまおうから！

全てを捨てる勇氣を持ってしまおうから！

これ以上…この親子に関わってはいけない…

私は心の中でそう何度も呟きながら…

解った！行こうぜ！啓太！と微笑みながら言った。

静かに玄關を閉まると私は声を殺し泣いた…

今までも私にはその涙の意味が解らない…

地獄の始まり

店長！本社の人事から電話ですが！

次の日、早朝から事務の女にそう呼び止められ私は一瞬、顔をしかめた。

めったに電話など無い部署からの突然の電話にきつとろくな話ではないと察していた。そして私の感、通りこの一本の電話から更なる苦しみが始まるうとはその時の私は想像すらしていなかった。

はい、坂本です…

私は受話器をとると少しだけ緊張した声でそう言った。

坂本誠さをですね…残念ですがあなたは今回のリストラ候補に見事、当選されました…

電話の相手は少しだけ威圧感のある声で私にそう言った。

貴方が逃れる道はただ1つです…観念してそろそろ本社に来なさい！

お・お前なく朝からふざけるなよ！

そんな私の不機嫌そうな言葉に…

電話の男は必死に笑いをこらえながら言った。

坂本…さすがのお前もリストラは怖いんだな〜と

誰かと思ったら人事部長の加藤さんじゃないですか…て・てめ〜加藤！ビビらすんじゃないよ！

彼の名前は加藤健一と言う。私と同期入社 of 社内で唯一、気が許せる奴である。今は本社で人事部長をしている。所謂、同期の出世頭と言う訳だ。

随分と暇なんだな〜人事は！現場と違って…

冗談だろ…毎晩、最近は午前様だ！上が訳の解らない事をやりはじめやがるから…

それで、用件は？まさか俺の声が聞きたかったなんていわんだろうな…

まあ〜それもあるけど実は各店舗に1人なポップライターを置くこ

とになってな！

ポップライター？なんでまた？商品の値段なんて解れば良いんじゃないの？

何もわざわざそんな奴を雇わなくても……つつたく！ろくなことを考えやしない！まあ、そう言うな……取り敢えず来週から1人、お前の店にも行くからよろしく！後でそいつの履歴書をファックスしておくから……

加藤はそう言いながら電話を切ってしまった……

その途端、いきなり私の携帯が鳴った！デスプレイには見慣れない携帯番号……

はい……坂本です……

カオルだけど今、大丈夫？そんなカオルからの電話……私は一瞬、辺りを見回すと小さな声で言った……

あ・あ・大丈夫だよ……と

動物園

自分はどうして生きているのか？そんな愚問を何度も自分に問いかけながら生きて気がする…

何度も何度も死ぬ事を試みながら挫折をして来た。

ふと、最近、気がついたのは自分は死ねないから生きて居るのだと言うこと…

結局、死ぬ事を選ぶ勇氣もなく人生と言う名の長い旅の自分の可能性と言う有るわけも無い可能性への戯言を捨てる勇氣も無いから私は生きて居る…

いつか必ず幸せになれるなんて到底、不可能な小さな可能性を夢見ながら…

今度の日曜日…休めないかしら？
なんでだい？

うん、私は休めそうだから…啓太を動物園に連れて行ってあげよう
と思っっているの！ほら、昨日…約束したでしょ。

私のような店舗で働く人間にとって日曜日に休暇を取ると言う事は
奇跡に近い！！解ったよ！大丈夫…

そう！良かったわ！啓太もきっと喜ぶと思う。

詳しい事はまた連絡するから…

私は電話を切るとカオルの携帯番号を「晃」と男の名前で登録し少しだけ困惑した表情で待受画面のカレンダーを見つめた。

小さな親友との約束を守る為？

いや…きっとそれはいいの良いい口実で、きっとただ、カオルに会いたかっただけなのかも知れない…

私はそのまま事務所に戻り加藤から送られて来た履歴書をファック
スから取り出した。

佐藤友美…

そう書かれた履歴書の氏名欄を見た瞬間…私の履歴書を持つ手は小

刻みに震えた。佐藤…友美…

私の運命の女の名前である。ファックスなので顔は殆ど解らない…
まさかな…友美…私の幻想まさかな…

私はそう自分に言い聞かせながらその履歴書を無造作に自分の机の
上に置いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4056t/>

幻君

2011年10月9日02時50分発行